

シンポジウム

「職業を通じて

慈愛の種を播きましょう！」

| | | |
|----------|------|------|
| コーディネーター | 矢田篤司 | |
| パネリスト | 斉藤 茂 | 南 尚次 |
| | 辻 諦淳 | 和佐昌彦 |
| 総 評 | 坂口富茂 | |

職業奉仕委員会 委員長 藤田貴司

10月の職業奉仕月間に当たり9月24日(火)例会にて「自分の職業を通じて感動した事」をテーマに17名の方々にスピーチをお願いし、もっとも印象深かった4人の方を選出しました。この4人の方々に10月1日(火)例会において、矢田篤司君をコーディネーターにシンポジウムを開催しました。

コーディネーター 矢田篤司

先週に引き続きまして、今週も職業奉仕委員会がプログラムを独占致します。先週のプログラムは「自分の職業を通じて感動した事」というテーマで17名の方々に3分間スピーチをして頂きました。

今夜のパネラーは先週のM・I・Pで最も印象深い話をしてくれました、各業界で御活躍の方々です。紹介致します。職業分類は和服製造配布・斉藤茂君、食品販売・南尚次君、仏教・辻諦淳君、米穀販売・和佐昌彦君の4人の方々です。「自分の職業を通じて地域の夢を語ろう」というテーマでお話頂きたいと思えます。

昨今の日本は景気の低迷と産業構造の変化、少子高齢社会など急激な変化を見せ、過去の常識とは違った新しい現実があり、これまでの知識や経験があまり役に立たず、将来に対する不安感をつのらせています。

しかし、このような時代であればこそ「日本人の心」である「思いやり」や「感動の心」を忘れず、お互いに自己研鑽に努め、世の弱者に救いの手を差し伸べる努力を通じて、心豊かな人達で溢れた住み良い社会を構築しようではありませんか。

パネリスト 斉藤 茂

私の職業は「きもの屋」でございます。

「慈愛の種を播きましょう」と云うタイトルで職業を通じてスピーチさせて戴きます。

季節は夏です。夏と云えばお子様にとって大変楽しい夏休みです。お盆、お祭り、花火大会、縁日等親子がふれあう沢山のイベントがあり、そこで私共の店に親子揃って「ゆかた」を新調するのにお買い求めに訪れて頂いている訳でございますが、ここ近年、若いお母さんのお子さんへの接し方、話し方が少々気に掛かる場面に遭遇しております。状況と云いますが、商品選択に入りお母さんがお子さんに対し自分で選ぶよう伝える訳でございますが、側で聞いている私共にとり、若いお母さんがお子さんに対するお子さんの自主性や判断力を養う為の家庭教育の一貫だとそう判断した訳ですが、いやはや実は私共の思惑とは少々違っており、お子さんの

選択した商品をお母さんは悉く拒否、挙げ句の果てに次はお母さんのおしつけ、今度はお子さんが拒否。（お子さんは既に三ツ子の魂が入ってますネ）側で見ている私共に取り大変悲しい居場所です。折角授かった生命です。お子さんの健やかな将来の成長を見つめ今一度「慈愛の気持ちを持ち」お子さんに接して戴きますよう切に望む事を若いお母さんに申し上げる事が店主としての務めだと折に実感しております。お祭りやお盆には気持ちを切替えて新調した「ゆかた」姿で神社・寺院の門前を潜りぬけて下さい。潜りぬける際には必ず神社・寺院の門前には「慈愛に満ちた標語」が記してあります。気持ちが豊かになります！！

以上でございます。有難うございました。

「食文化思考」 南 尚次

豊かな自然、四つの季節に恵まれた私達の匡、日本。四季折々の食べ物がある日本の和食、その魅力に魅了されて和食の職人になる道を選んだ私です。特に、美しい山と川、きれいな海があるふるさと田辺で取れる素材を材料にして、料理を作る事が出来れば良いなと思って、田辺で開業する事にしました。近頃は、洋風志向が強い、又中華料理、イタリア料理とお客様のニーズも大変多様化して参りましたが、でもまだまだ和食の人気は根強いものがあります。私自身もがんばらなければと思っております。

今日は外食産業について、少し考えている話をしてみたいと思います。最近、田辺を中心に、紀南地方で急に増えてきました24時間営業のコンビニエンスストア、「ローソン」、「ミニマート」、この2社のビジネス商戦の真中で、食品販売業界は、大部分は異なるものの、競合する商品もあり、大変でございます。

私達は料理を作る時、素材と時間を良く考えて、いたみにくい料理を作る様に心掛けるものですが、コンビニエンスストアの商品は腐らない物を作って売っている。常温で2、3日は大丈夫と言われているおにぎり、この商品の違いが今後お客様の体に悪い影響が無ければよいかと、他人事ながら心配しております。又この商品を作る過程（方法）で、大きな会社では、すべて他所で一括して作り、各地へ発送するチェーン店方式、水からはじまり、材料、人手全て他所で調達するので、地元産業発展と言う事からすれば、田辺にとっては好ましい事ではない。その様に心から思う。私はこの地方で取れる素材で地元の人々と一緒に仕事が出来れば、地元発展に役立つ事が出来ると思い、がんばって行きたいと思っております。

私達がよく使う魚類ですが、この地方の漁師さん達もがんばっておられます。御坊から串本まで8ブロックに分かれそれぞれの漁協が特産品造りに励んでおられます。

すさみではカツオをブランド品に、又イセエビの放流を行ない、田辺漁協では、今年は10万匹のイサギ、その他タイ、ヒラメの放流を毎年行なっており、「取る漁業」より「育てる漁業」をめざしてがんばっています。

私はこのきれいな海を守るため、「貧者の一灯」かもしれないが、3年前に私達はまゆうロータリークラブ環境保全委員会が「いちいがしの会」の後藤先生を招待し、「森林を守る事は、川・海を守る事だ」という卓話を聞き、環境保全委員会の計画により、環境保全に特に寄与されているグループであると認め、10万円の寄付金を贈呈した事がありました。「いちいがしの会」へ私も入会させていただきました。水源地の森林、ミネラル豊かな川、海を守るためがんばって参ります。

今年のRI会長の言われている「慈愛の種を播きましょう」この精神に少しは近づけるかな？とにかく、今後はまゆうロータリークラブの会員として職業を通じ、クラブの委員会活動を通じて、地域発展のためにがんばって参りたいと思っております。

辻 諦淳

11月29日(日)の夜、たまたまテレビのスイッチを入れたところ、乙武洋匡(おとたけひろただ)という人が画面に出ていた。

「五体不満足」という本の著者である彼は、両手両足ともに不自由な体である。その彼がス

ポーツキャスターとして世界を駆け巡って取材した、という番組であった。

その番組の中に、タイ国のキックボクシング(ヤムタイ)の少年選手を取材した場面があった。

キックボクシングはタイの国技で、国民の多くが子供の時から経験し、肉体はもちろん、精神的な成長にも大きな影響を与えているということであった。

十歳そこそこの少年と、十三歳位の少年にスポットを当てていたが、その少年達は親元を離れてジムに泊まり込み、体を鍛えに鍛え、試合をすることにより、そのファイトマネーで自立し、親に仕送りをしている子供もいるという。

極貧の中、幼い子供のファイトマネーをあてにしている家族、その家族の為に必死になって試合に臨んでいる子供、何か、本当に感動するというか、胸がしめつけられる思いになった。ところが、その、すごいファイトをする子供はというと、目が澄みきっていて、非常に優しく、他人を思いやる心を持っている。礼儀も正しく、お礼は必ず両手を合わせて合掌しているのである。

「日本人は、物質的に豊かになり、その代りに心が貧しくなった」と言われて久しい。この、タイの少年達は、日本人の多くが忘れてしまった心、物質的な豊かさの中で忘れ去ろうとしている心を厳しい生活の中で持ち続けている。

では、その日本人が忘れ去った心とは一体何なのか。私は、それは感謝の心ではないかと思う。特に、「普通に食事ができることに対する感謝」が忘れられている。「いつでも、どこでも、自分の好きなものを、自分の好きなように食べることができる。」こんな思いが、「食べる」ということをおろそかにし、食べることができることに対する感謝の心を忘れさせるのではないか。

「いただきます」という言葉を、学校給食の場で言わせない所がある、という話を聞いた。「宗教のにおいがする」ということらしいが、極端な所では、食事開始の時に教師が「ピーッ」と笛を吹き、それを合図に一齐に食べ始めるということだ。何か恐怖さえ覚える。「いただきます」というのは、感謝の言葉であるが、それは「尊い生命を私の為に犠牲にさせていただきます」という謙虚な姿勢を表す言葉であると思う。

子供達に感謝の心を植えつける、これは簡単なようで非常に難しい。親をはじめとする周囲の大人自身が謙虚な姿勢を示し、感謝の生活をしなければ、絶対に無理だ。

「あり余る生活に慣れきった日本人の大きな忘れ物」、乙武洋匡さんの、「日本人が忘れてしまった、豊かな、優しい心を、貧しい生活に必死に耐えて頑張っているタイの子供達が持ち続けている」と涙ながらに語っている姿に、本当に心が撃たれた。

私は、大きな事は何一つできないが、この、「食事に対する感謝の心を表すこと」すなわち、食前に「いただきます」の一言を言うことが、豊かな優しい心、謙虚な心を持った人間が育っていくための、欠かせない大切な要因であることを確信し、あらゆる機会を通じて、このことを訴え続けて行きたい。

和佐 昌彦

私の職業は、皆様もよくご存じの街のちいさな米屋です。

その私達の米穀業界の今の現状はどんなものか？と言えば、どの業界でも、よく言われている事と大差はありません。

業界全体の高齢化・後継者不足等々色々ありますが、なにより私共の業界の大きな転機となったのは、もう皆様の記憶からも忘れ去られようとしている、あの米パニックです。

平成5年の天候不順・エルニーニョのおかげと言われる冷夏で、米の収穫は格段に落ち込み、又政府の在庫米の数量を段階的に減らしていく政策とまともにぶつかり、あの平成米騒動と相成りました。そして私達にとってさらなる逆風となったのが、あの九州出身のお殿様の末裔とかの総理の決断のウルグアイラウンドの関税化による外米解放と緊急輸入でした。

それからは、流通改善・規制緩和・価格破壊の名のもとに日本の主食たる米は農家から消費者に渡る迄の過程のなかで、それこそ、何でも有りのような状況になってしまいました。

そんな状況の中で職業を通じて、最近感動したことなど、まずありませんが、しいてあげればロータリーへ入会させて戴いた事が感動したひとつです。短い時間ですが、メンバーの皆様

とお話出来る事が大変嬉しいです。今度共宜しくお願いします。

さて私は、あの米パニック以来仕入れに関してはひとつの方向転換をしました。それまでは、食料管理法に基づいていたのを農家より直接仕入れる、もう一步踏み込み農家と契約し新米ができるとこちらから出向いて買い上げてくるというような仕入れ比率を上げ卸元からの仕入れ比率をかなり下げました。

そんな農家回りを続けていますと、農家の方からよく父や母の話題が出てきて驚かされます。

私が知らない両親の幼少の頃の話の聞いたりすると初対面の方でも本当に心安く思え、又仕入れの面でも大変な切り札となります。

今年のロータリーのテーマは“慈愛の種を播きましょう”ですが、“慈愛”とは辞書で調べてみると“いつくしみ・かわいがる”とあります。私の両親は、二人ともすでに他界しましたが私にとってこんなところに慈愛の種を播いておいてくれたのかな？と感謝しています。

ガバナーが4クラブ合同で目のご不自由な方のお話をされた時、“慈愛の種を播きましょう”はそれぞれが些細な事でも、“だれかの為に自分ができる事をする事だ”と、おっしゃっていたように思います。

私にとって「職業を通じて慈愛の種を播く」と言う事は、一人でも多くの人にお米が旨い！・ご飯が美味しい！と言って貰えるように努力する事かな？

総 評 会長 坂口富茂

「職業を通じて、慈愛の種を播きましょう！」

これは、今年度の国際ロータリーのテーマである「慈愛の種を播きましょう！」という事で、各会員が常日頃、仕事を通じて奉仕を考え実践しておられることを発表して頂き、大変有意義なシンポジウムとなりましたことに感謝申し上げます。

見返りを求めない慈愛に満ちた奉仕の積み重ねは、その人をなお一層高みへと押し上げることでしょう。

私たちロータリーには、他に類を見ない「職業奉仕に関する声明」、「職業奉仕宣言」、「四つのテスト」等がありますが、綱領として、事業および専門職務の道徳的水準を高めること：あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識を深めること：そしてロータリアン各自が業務を通じて社会に奉仕する為にその業務を品位あらしめること：を鼓舞育成するというコトバで締めくくります。有難うございました。

最後に、職業奉仕委員会の皆さん、パネリスト、コーディネーター、そして、出席者の皆さんに感謝致します。有難うございました。